

さるほどに、阿波、讃岐に平家をそむいて源氏を待ちける者ども、あそこの峰、ここの洞より十四、五騎、二十騎、うちつれうちつれ参りければ、判官ほどなく三百余騎にぞなりにける。「今日は日暮れぬ。勝負を決すべからず」とて引き退くところに、沖の方より尋常にかざったる小舟一艘、汀へ向いてこぎ寄せけり。磯へ七、八段ばかりになりしかば、舟を横様になす。「あれはいかに」と見るほどに、舟のうちより齡十八九ばかりなる女房の、まことに優にうつくしきが、柳の五衣に紅の袴着て、みな紅の扇の日いだしたるを、舟のせがいはさみたてて、陸へむいてぞまねいたる。判官、後藤兵衛実基を召して、「あれはいかに」とのたまへば、「射よとにこそ候ふめれ。ただし大將軍、矢おもてにすすんで傾城を御覧せば、手たれにねらうて射落とせとのほかりごととおぼえ候ふ。さも候へ、扇をば射させらるべうや候ふらん」と申す。「射つべき仁はみかたに誰かある」とのたまへば、「上手どもいくらも候ふなかに、下野国の住人、那須太郎資高が子に与一宗高こそ小兵で候へども手ききで候へ」「証拠はいかに」とのたまへば「かけ鳥などをあらがうて、三つに二つは必ず射おとす者で候ふ」「さらば召せ」とて召されけり。

与一そのころは二十ばかりの男子なり。かちに赤地の錦をもっておほくび、はた袖いろへたる直垂ひたたれに萌黄威の鎧着て、足白の太刀をはき、切斑の矢の、その日のいくさに射て少々かしらだかのこつたりけるを、頭高かしらだかに負ひなし、うす切斑に鷹の羽はぎませたるぬた目の鎧をぞさしそへたる。滋籐の弓脇にはさみ、甲かぶとをば脱ぎ高紐にかけ、判官の御前にかしこまる。「いかに宗高、あの扇のまんなか射て、平家に見物せさせよかし」与一かしこまって申しけるは、「射おほせ候はむこと、不定に候ふ。射損じ候ひなば、ながきみかたの御瑕おきずにて候ふべし。一定仕らんずる仁に仰せ付けらるべうや候ふらん」と申す。判官大きにいかって、「鎌倉をたつて西国へおもむかん殿ばらは、義経が命をそむくべからず。すこしも子細を存ぜん人は、とうとうこれよりかへらるべし」とぞ

そのうち阿波、讃岐で平家に従うのをやめて源氏を待っていた者たちが、あそこの峰、ここの洞から一四、五騎、二十騎、次々と連れ立って来たので、判官義経の勢力は短時間で三百騎あまりになったのだ。「今日は日が暮れた。勝負を決することはできない」といって兵を引き上げるところに、沖の方から立派に飾った小舟が一艘、汀にむかってこぎ寄った。磯まで八十メートルほどになったところで、舟を横向きにした。「あれはどうしたことだ」と見ているうちに、舟の中から一八、九歳ぐらいの女房で、とても上品でかわいらしい人が、柳の五衣に紅の袴を着て、全体は紅で真ん中に金色の太陽を描いている扇を、舟棚にはさんで立てて、陸にむかって手招きしている。義経が後藤兵衛実基を呼んで、「あれはどういうことだ」と言ったところ、「射よとっているようですね。ただしあなたがもし矢の正面に行つて美女をご覧になったら、弓の名手に狙わせようというはかりごとだと思います。それでも、扇を射させるのがよいでしょう」と言う。「射ることができるのは味方では誰だ」と言うので、「名手はたくさんおりますが、中でも下野国の住人、那須太郎資高の子の与一宗高は、身体は小さいですが腕前はたいしたものですよ」「証拠はなんだ」と言うので、「飛ぶ鳥を射ることを競つて、三つに二つは必ず射おとす者ですよ」「それなら呼べ」と言つて呼びよせた。

与一はその時は二十歳ぐらいの若い男である。赤地の錦で前襟や袖ぐりを彩つた濃い紺色の直垂に、萌黄緘の鎧を着て、銀の足金がついた太刀を腰にさし、その日のいくさで射て少し残つた切斑の矢を頭の上に出すように背負ひ、薄い色の切斑に鷹の羽を混ぜた、鹿の角で作つた鎧矢もいっしょにさしていた。滋籐の弓を脇にはさみ、甲を脱いで高紐にかけ、義経の御前にかしこまった。「どうだ宗高、あの扇のまんなか射て、平家に見物せさせてやれ」与一はかしこまって、「射ることができるどうか、定かではありません。もし失敗すれば、長い間お味方の恥となりましょう。必ず射ることができる人に仰せつけるべきかと存じます」と言つた。義経はひどく怒つて「鎌倉を出発して西国にやつてきた者どもは、私の命令に従わなくてはならぬ。少しでも逆らう者は、さつとここから帰るがよい」と

のたまひける。与一かざねて辞せばあしかりなんとや思ひけん、「はづれんは知り候はず、御定で候へば、仕ってこそ見候はめ」とて、御前をまかり立ち、黒き馬の太うたくましいに、小ぶさの鞆かけ、まろぼやすったる鞍おいてぞ乗ったりける。弓とりなほし、手綱かい繰り、汀へむいてあゆませければ、みかたの兵どもうしろをはるかに見おくって、「この若者一定仕り候ひぬとおぼえ候ふ」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。

矢ごろすこし遠かりければ、海へ一段ばかりうちいれたれども、なほ扇のあはひ七段ばかりはあるらむとこそ見えたりけれ。ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに、をりふし北風激しくて、磯打つ波も高かりけり。舟は、揺り上げ揺りすゑ漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家、舟を一面に並べて見物す。陸には源氏、くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも晴れならずといふことぞなき。与一目をふさいで、「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願はくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまへ。これを射損ずるものならば、弓切り折り自害して、人にふたたび面を向かふべからず。いま一度本国へ迎へんとおぼしめさば、この矢はづさせたまふな」と心のうちに祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹き弱り、扇も射よげにぞなったりける。与一、鏑を取ってつがひ、よっぴいてひやうど放つ。小兵といふちやう十二束三伏、弓は強し、浦ひびくほど長鳴りして、あやまたず扇の要ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切ったる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空にひらめきけるが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散ったりける。夕日のかかやいたるに、みな紅の扇の、日出だしたるが、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ揺られければ、沖には平家、船端をたたいて感じたり。陸には源氏、^{えびら}箆をたたいてどよめきけり。

言った。与一はこれ以上辞退するのはよくないと思ったのだろうか、「はづれるかもしれませんが、ご命令ですからやってみましょう」と言って、義経の前から下がって、黒い馬で太くたくましいのに、小房のついた鞆をかけ、まろぼやの紋様を擦りこんだ鞍をつけて乗った。弓を持ち直し、手綱を繰り、汀に向かって馬を進めたので、味方の軍兵たちはその後ろ姿を遠くから見送って、「この若者ならきつとやってくれると思います」と言ったので、義経も頼もしげに見た。

矢を射るには少し距離が離れていたもので、海八十メートルほど乗り入れたが、それでも扇までの距離は七十メートルぐらいあるように見えていた。頃は二月十八日の午後六時ごろだが、その時はちょうど北風が激しく吹いて磯に打ち寄せる波も高かった。舟は波に揺られて上がったり、下がったりするので、扇もはさんである串に固定されずひらめいている。沖では平家が舟を並べて見物している。陸では源氏が馬の口を並べてこれを見る。どちらもどちらもじつに晴れがましい。与一は目を閉じて、「南無八幡大菩薩、我が国の神明、日光の権現、宇都宮、那須の湯泉大明神、願わくはあの扇の真ん中を私に射させてください。もしこれを失敗したなら、弦を切り弓を折って自害し、二度と他人に顔を見せないつもりです。もう一度故郷に私を迎えてやろうとお思いになるなら、この矢を外させないでください」と、心の中で祈って、目を開いたところ、風も少し弱くなり、扇も射やすくなっていた。与一は鏑矢をとって弓につがえ、引きしぼってヒュッと放った。身体は小柄だが、矢は十二束三伏、弓は強弓、浦に響くほど長鳴りして、ねらい違わず扇のかなめのあたりから三センチほど上を、ヒュウツと射切った。鏑矢は海に入り、扇は空に舞い上がった。しばらくは空でひらめいていたが、春風に一もみ二もみもまれて、海へさつと散った。夕日が輝いている海面で、紅に金色の太陽を描いている扇が、白波の上にただよい、浮いたり沈んだり揺られたので、沖では平家が、舟端をたたいてすっかり感じ入る。陸では源氏が、箆<腰につけた矢を入れる箱>をたたいて歓声をあげた。